本学のナースリー・ルームにおける保育について（第2報）

乳児保育の実際とそのケース・スタディ

跡見一子・宮崎照子・田沢紀代子・山崎富代・
梶山公子・清宮静子

"Nursery Education in the Day Nursery attached to Tokyo College of Domestic Science."

Kazuko ATOMI, Teruko MIYAZAKI, Kimiko KAJIYAMA,
Tomiyo YAMAZAKI, Kiyoko TAZAWA, Shizuko SEIMIYA.

We will report here the outline of the history of establishment of our nursery. And two cases of babies, the one entering our "Room" at two months old and the other entering after six months home nurture, will be reported, analyzing and comparing the two cases in their physical and mental development.

まえがき：第1報において，本学のナースリー・ルーム開設の経過および施設・設備・保育の目標・計画等をあげ，幼児の保育の実際について述べたが，第2報として，乳児保育の実際について紹介し，事例をあげて，その保育の実態を報告したいと思う。

本学のナースリー・ルームに入室した乳児の中から，産休あけ（生後2か月）から入室したものと，家庭で6か月育てられてから入室したものとを比較して，その心身の発達・成長に関して，どのような影響・差異があるかを調査してみた。

I　ナースリー・ルームの乳児保育の実際

1. 保育の対象

昭和42年5月1日から，昭和45年9月30日までに入室した乳児の数は11名で入室順にあげると次のとおりである。（表1）

No.	氏名	性別	生年月日	分娩状況	生下時体重	栄養法	入室年月日	退室年月日	両親の職業		出生時の両親の年齢		家族構成
									父	母	父	母	
1	H. M	♂	s 41.11.10	自然	3365 g	人工	s 42. 9.10	s 42. 9.30	歯科医	衛生士	32歳	27	父，母，姉
2	H. H	♂	42. 7.18	〃	3020	混合	42.10. 2	43. 7.31	建築士	保健婦	27	27	父，母
3	R. Y	♀	42. 7.26	〃	2430	〃	42.10. 2		公務員	教員	36	37	父，母，姉
4	M. T	♀	42. 9.21	〃	2770	〃	42.12. 1	43. 5.31	公務員	公務員	28	25	父，母

5	M. M	♀	42.10.17	自然	3055	母乳	43. 5. 8		歯科医	衛生士	32	24	父,母
6	M. Y	♀	43. 8. 2	吸引	3100	混合	44. 4.10	44.11.30	会社員	会社員	24	29	父,母
7	T. S	♀	43. 7.18	〃	3680	母乳	44. 4.10	44. 8.31	自家営業	家業手伝	35	31	父,母,姉兄
8	I. S	♂	43.11. 9	自然	3400	混合	44. 4.10		〃	〃	28	27	父,母,姉祖父
9	N. I	♀	44. 8.19	〃	3200	〃	44.11.13	45. 2.20	公務員	公務員	31	26	父,母
10	T. N	♂	44. 4.25	〃	3550	母乳	45. 4.10		自家業	家業手伝	28	25	父,母,祖母
11	K. Y	♀	44. 4.28	〃	3400	混合	45. 6.15		〃	〃	26	24	父,母,叔母

このうち退室したものが6名，幼児組に移行したものが5名である。

対象児の父母にアンケート調査をした結果

1) 入室の理由：a. 子どもの面倒をみる人がいない。 b. 環境がわるくてよい育児ができない。 c. 共かせぎのため，母親が仕事をつづけてゆきたい。d. 未熟児で育児に不安である。 e. 母親が病気になったため。f. よい設備とよい先生がいるから，等があげられた。

2) 退室の理由：a. 父親の転勤，b. 母親の退職， c. 家庭の事情が変わり，子どもの世話ができるようになった，等の回答が得られた。

2. 乳児保育の日課

乳児保育の日課は次の通りである。(表2)

時間	保育内容	1か月	2～3か月	4～6か月	7～9か月	10～12か月
9:00	順次入室					
	健康視診・検温	睡眠		睡眠	日光浴 外気浴	ひとりあそび 立つ，歩行
10:00	適宜	授乳 (母乳または粉乳)	授乳	離乳食 ＋乳汁	離乳食 ＋乳汁	授乳＋おやつ
11:00	授乳・食事	睡眠	睡眠 日光浴 沐浴	日光浴 外気浴 睡眠 沐浴	睡眠 沐浴	睡眠 沐浴
12:00	おむつ交換・		果汁	果汁	果汁 ひとりあそび	離乳食 ・＋乳汁
	日光浴・散歩	沐浴・体操	おしゃべり 手あそび	ひとりあそび	這いはい	あそび 歩行運動
13:00	沐浴・被服調節	授乳 (母乳または粉乳)	授乳	授乳	離乳食 ＋乳汁	授乳＋おやつ
14:00	一人あそび	睡眠				
15:00			ひとりあそび			おしゃべり
16:00	健康視診・検温 連絡簿記入・身辺整理		睡眠	睡眠	睡眠	睡眠
17:00	順次帰宅					

食事の規則性から日課時間がわり出されてその間，適宜に沐浴，日光浴，外気浴，散歩，ひとり遊び，被服調節などがもりこまれ，その日課の中で，小児科医，看護婦が健康状態を見守っている。

3. 食事の与え方

乳児の場合は，授乳を中心として1日の生活目標がたてられている。ナースリー・ルームにおけ

る授乳の方法は，4時間乳という規則授乳をとっている。これは入室時刻が午前9時であり，通園のために，徒歩または車で刺激されている乳児の疲労と精神の安定とを考慮して，10時にはじめての授乳をして，午後2時に第2回目，第3回は帰宅して6時に，というように計画されている。そして，これに付随して離乳食も，午前中に1回の離乳食を与えるのが理想的であるにもかかわらず，睡眠・安静時間や食欲も考慮に入れて離乳初期においては，午後2時の授乳の前に離乳食を与えるという方式をとっているが，現状ではうまくいっている。

次に授乳の問題として，母乳栄養と人工栄養とを比較すると，粉乳の研究がいかに開発され，良質のものができているとしても，母乳の栄養には劣る事実と母親意識をたかめるために，条件の許すかぎり，規則授乳を守り，母乳を与えるようにすすめている。その点校内に勤務中の教職員は有利で，実施して効果をあげている。

離乳食の与え方は発育程度や食欲，健康状態による個人差が大きいので，具体的に数量を示すことは困難であるが，だいたいのめやすとして月齢別にあらわすと次の通りである。（図1）

食事の内容では，澱粉を主とした穀類。蛋白質を主とした卵，鳥獣肉，豆類。野菜・果実類。油脂および油脂にとんだ食品。等の四つに分けることができるが，その1回量およびバランスは（表3）の通りである。

これはナースリー・ルーム独自のもので，文部省科学研究離乳研究班第4回協議会報告による調査を参考にして基準をつくり，離乳実施にあたっては乳児の発育，食欲，健康その他の事情を考慮して個別的に進め，型通りの強制は避けている。

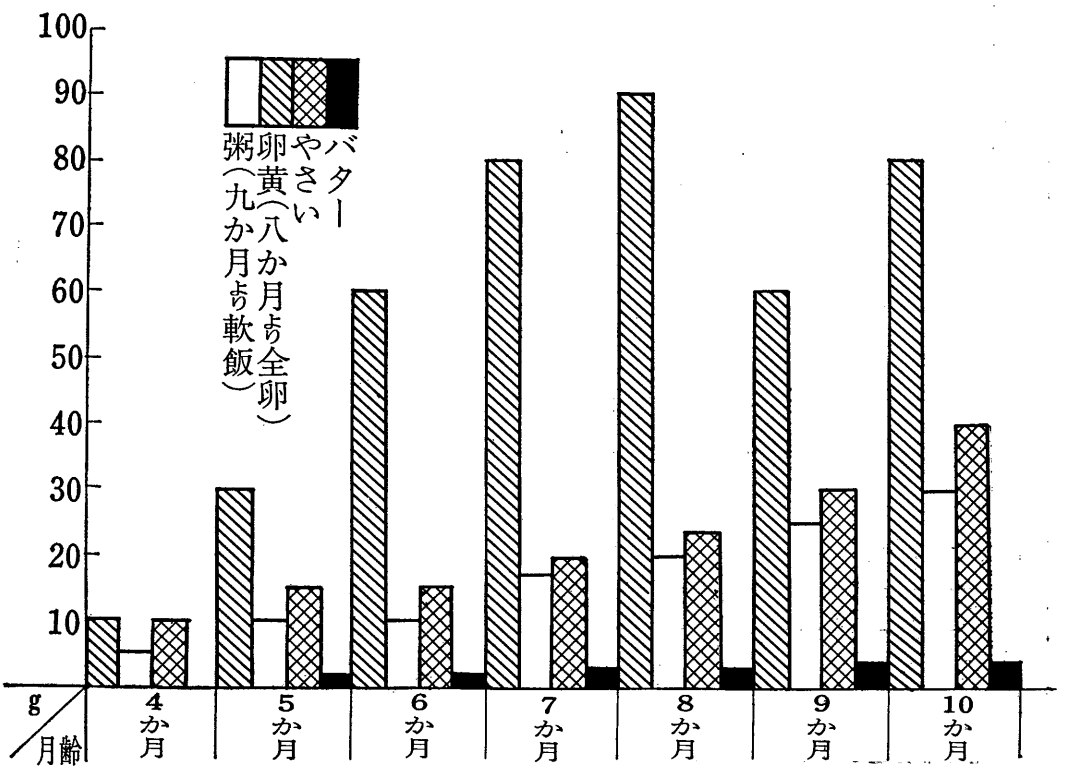


図1

表 3

食品＼月齢	4	5	6	7	8	9	10
							g
粥・飯	10	30	60	80	180	120	160
小麦粉			10	15	20	20	25
芋		8	12	20	25	25	45
卵		5	10	10	17	28	30	35
魚				6	12	10	15	18
肉						5	10	15
野菜	10	15	30	40	70	100	120
果汁	30	50	50	70	70	100	100
油		2	4	5	5	6	7

離乳食とは食品だけで考えるものでなく，調理法によっても，そのできあがり形態，色彩，調味，与え方に大きな差を生ずるので，同一食品でも適・不適があり，食品自体の可否決定はむずかしい。

食事に関する保育の態度が性格形成と関係のあることは周知の通りであるが，ナースリー・ルームにおいては，いちおう集団保育の場ということから，食事の時間が規則的になっているので，保育者はその範囲で許すかぎり日課を家庭生活に準じて行なうように工夫し，情緒の安定についてつとめている。乳児の状態を正しく観察しつつ，食欲を中心にして進め，マナーや清潔の習慣形成もおりこんで，分量の強制は避けるようにつとめている。

4. 家庭との連絡

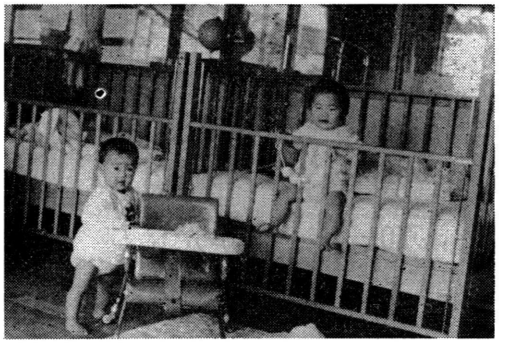
ナースリー・ルームの保育は昼間8時間だけの保育であるから，入室前および退室後の生活との関連は特に重要であり，家庭とナースリー・ルーム，

連絡簿

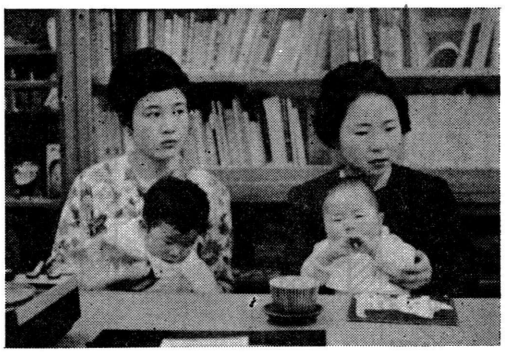
		月 日 曜	月 日 曜	月 日 曜
乳児室から		体温 室温 湿度	体温 室温 湿度	体温 室温 湿度
	ミルク	時 分 cc	時 分 cc	時 分 cc
	果汁	時 分 cc	時 分 cc	時 分 cc
	離乳食	時 分	時 分	時 分
	排泄	時 分 便性	時 分 便性	時 分 便性
	睡眠			
	入浴	時 分	時 分	時 分
	今日の状態			
家庭から	ミルク	時 分 cc	時 分 cc	時 分 cc
	離乳食	時 分	時 分	時 分
	排泄	時 分 便性	時 分 便性	時 分 便性
	睡眠	夜 時 分～朝 時 分	夜 時 分～朝 時 分	夜 時 分～朝 時 分
	入浴	時 分	時 分	時 分
	今日の状況			

図 2

乳　児　室



父母との連絡会



母親と保育者との連絡は十分に配慮されねばならず，乳児の生活環境だけでなく，情緒の安定，生活の規則性，食事，睡眠，排せつ，清潔，着脱衣等の基本的生活習慣の形成の過程，心身の発達および記録などにも一貫性を保ってゆくためにも，家庭との連絡は特に重要であり，そのためにいろいろ工夫している。

1) 連 絡 簿（図2）

乳児の受け渡しの際に必ずそれぞれの要項を記入して，家庭の生活状況や，ナースリー・ルームの行動を知らせ合い，互に連絡をとり合って，乳児の生活が円滑にゆくように配慮している。

食事の分量と内容，時間をはじめ，検温，身体計測，沐浴，排せつ，睡眠の時間や状態，その他の行動観察記録，注意事項などを記入して，口頭に添えて，発育歴の記録も兼ねられるように細かく日常生活を記入して連絡をとりあっている。

2) 父母との連絡会

さらに月1回退室前30分間を父または母親と保育者が集まって毎日の報告・連絡以外の総合的な方針や疑問を話し合いで解決している。ここで提出される問題には，ナースリー・ルームの保育の目標，カリキュラム・月別献立・行事予定・衣類持物の点検・注意・しつけの方針などがあり，父母の側からの育児の相談，家庭における子どもの状態などがあげられて，家庭とナースリー・ルームとが一貫した保育を行なうように話し合いがなされている。（前頁の写真参照）

Ⅱ 事　　例

保育中の乳児の中から，産休あけから入室したR・Yと，家庭で6か月保育されて入室したものM・Mとを対象として，両者の乳児期の生活を比較してみる。

1. 対　　象

1) R. Y.

出生：昭和42年7月26日生，女児

入室日：昭和42年10月2日，入室当時の年齢は2か月6日

出生時の状況：父36歳，母37歳で分べんは自然分べんで，新生児黄疸は軽く，生下時体重は2430g身長は 47.0 cm，頭囲 33.0 cm，胸囲 29.0 cm，栄養方法は母乳栄養である。

発育状態：入室前は，低出生体重児であったが，母乳分泌がよく，第2子のために，その後の発育は順調であった。入室後は，ナースリー・ルームにいる間は人工栄養にし，家庭では母乳栄養という混合栄養であった。発育は（図3）の通りである。

1歳時の体重は 8200g，身長は 71.5 cm であり，カープの指数は15である。

家族状況：父は公務員，母は教員で，共に大学卒で，健康であり，姉は5歳2か月ちがいで健康で幼稚園を経て小学校に在学中，近所に祖父母の家（母親の実家）があり，交流が頻繁である。家屋は住宅街にあってアパート，2室（10畳5畳）である。

親の保育態度：しつけは寛大，第2子なのですべてが大ざっぱであるが，放任というのではなくて愛情は豊かであり，祖父母がそばにいるので，週日の生活は保育の主導権が，忙しい両親より祖父母にあり，過保護で溺愛の傾向にある。しかし日曜，休日は父母とともに普通の生活にもどって，安定性のある家庭生活をすごしている。

子どもの性格傾向：陽気で愛想がよく，だれとでもすぐ仲良くあそぶ一方，頑固で落着きがなく，神経質で興奮しやすい。気にいらぬことがあると1時間でも泣きやまない。

入室理由および経過：出生時，低出生体重児であったためと，近くに祖母がいるが保育方法が不安

であり，両親とも勤めているので，日中はナースリー・ルームにあずけ，夜はいっしょに暮らしたいという理由で，産休あけとともに入室した。

入室当時は過保護が影響して，ベッドにひとりおかれると甘えて泣いてばかりいて，泣きつかれてそのまま眠ることが多く，抱かれて眠ったり，人見知りも多く，見慣れた保育者の顔を見ても甘えて泣いてばかりいた。その後，次第に安定してきて，少しずつひとりあそびをしはじめて，わがままもへり，運動範囲が拡がると同時に自立性が強くなり，おとなのいうことを理解して，できることはなんでも積極的にするようになってきている。

2) M. M.

出生：昭和42年10月17日生，女児

入室日：昭和42年5月8日，入室当時の年齢は6か月21日。

出生児の状況：父31歳，母23歳で，分べんは自然分べんで，予定日より4日遅れたが，新生児黄疸は軽く順調で，生下時体重は 3055 g，身長は 49 cm，胸囲 32.5 cm，頭囲 33 cm，栄養方法は母乳栄養である。

発育状態：入室前は身体の発育は良好であったが，親の職業が開業医のため父母ともに忙しく，乳児期6か月まで，ほとんどベッドに寝かせたままの状態であった。その発育は（図3）の通りである。

1歳児の体重は 7780 g，身長は 71.8 cm であり，カープの指数 14.5 である。

家族状況：父は歯科医，母は短大出の歯科衛生士でともに健康であり，商店街の一角に開業しており，第1子で，3人家族である。1階が診療室，2階が住居で4室（23畳）ある。

親の保育態度：両親そろって診療室で仕事をしているので，面倒をみる人がいない。また手をかけない方針で育てている。このため夜は仕事が終ると1日分をまとめてかわいがる。特に父親の溺愛が目立ち，遅くまで入浴，あそび相手となって起きているために就寝時刻がのび，翌日入室する時は，眠っているところを無理に起こしてくるので，いつも不機嫌である。母親は放任とはちがう消極的拒否型の態度が目立つ。

子どもの性格傾向：依存性がつよく，神経質で人見知りがはげしく，見慣れない人を見ると泣き出して，食事をすることも，抱かれることもいやがる。無口でおとなしく，反応が遅い。

入室理由および経過：開業歯科医で母親も手伝っているため，保育する人手がないことと，人を雇うことより預けて集団保育をしてもらい，友達あそびのできる子にしたいという希望で入室した。栄養は3か月まで母乳，4か月で混合にした。4か月末には人工栄養にきりかえ，生後6か月まで，ほとんど寝かせたままであった。また，授乳時間以外はどんなに泣いていてもほうっておいて，自然に泣き寝入りをするにまかせていた。

入室当時は動きが少なく，うつ伏せに寝るくせがあり，熱を出しやすく，かぜもひきやすい状態であった。

2) 体 重 表

R. Y, M. M の体重増加を表にすると（図4）の通りである。身体の発育においてM. Mはは入室前にはかなり良好であったのに比べて，入室後は風邪や下痢で，病気休室が多く，その度に減少して停滞している。R. Y は小柄ながら，順調にのびていて，標準に近くなっている。いずれも，あまり差がみられない。

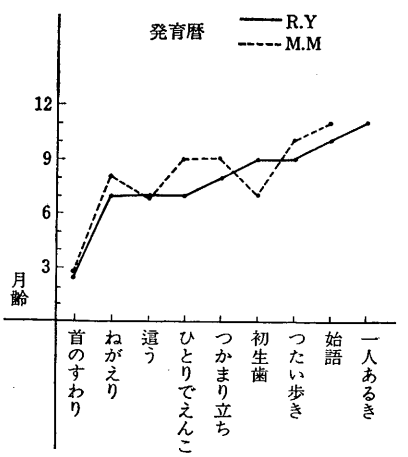


図 3

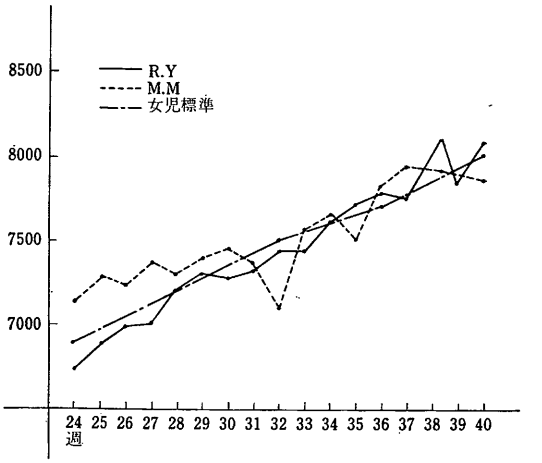


図 4

3. 乳幼児発達検査

ナースリー・ルームでは発達検査を毎月1回定期的に行なっているが，このうち，遠城寺式乳幼児分析的発達検査を，生後9か月と12か月とを比較してみると（図5）の通りである。9か月では移動，手の運動は大差のないのに社会的発達は非常に差が出ている。M. Mは情意の発達，知的発達が社会的発達についで，遅れている。12か月では，言語の発達の遅れも似ているし，プロフィールが，指数の差こそあれ，大体同じ傾向になってきている。ここに9か月から12か月の3か月間のナースリー・ルームの保育の影響が明らかにみられる。

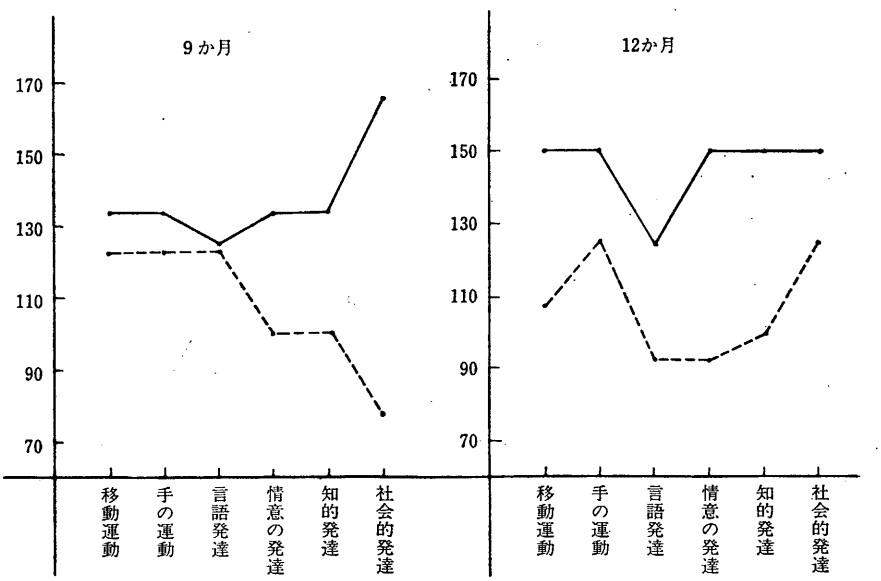


図 5

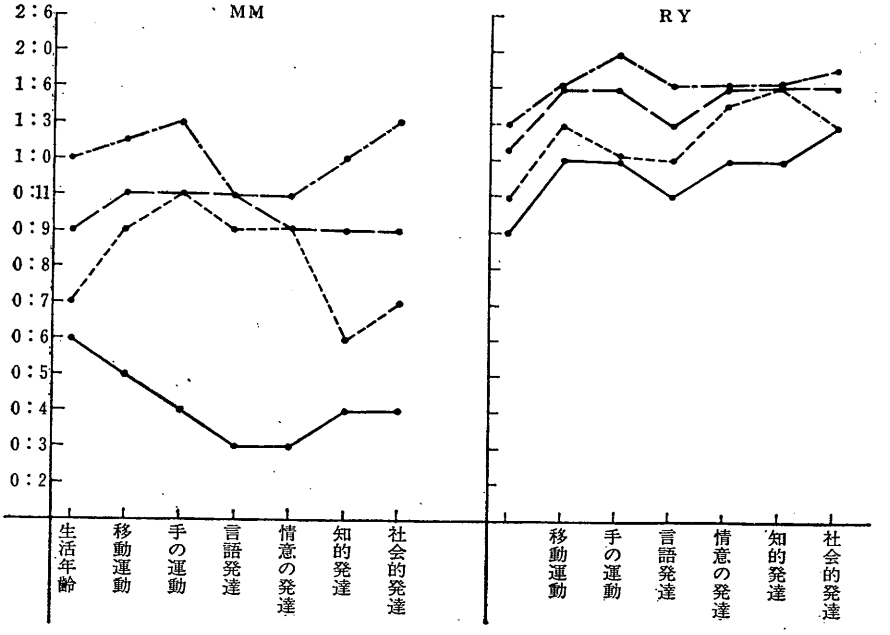


図 6

次に２児の生活年齢による発達のプロフィールをみると（図６）

M. Mは知的発達が，目立っているし，社会的発達が，これにつづいている。しかし情意の発達と言語の発達があまりのびていない。

R. Yは全体的に高く，ことに手の運動の発達がすすんでいるが，集団保育の欠点といわれる言語発達がやはり遅れているのが注目される。

その他の検査としては，津守真・稲毛教子両氏の乳幼児精神発達診断法による質問の回答では，D. QがR. Yは 121，M. M は 109 を示し，M. C. Cベビーテストでは，M. AがR，Yは 120，M. M は 108 であり，ほぼ同じような値が出ている。

4. 食事の量と離乳食のとり方

乳汁栄養のみで育てられた期間の両者の発育はあまり大差がみとめられない。しかし，やがて離乳がはじまり，半固形食から次第に固形食形態に進んでくると，身体発育の伸びがちがってくることは（図４）をみると明らかになっている。R. Yは入室と同時に混合栄養となり，授乳は不規則になりがちであったが，離乳の開始は４か月からであり，第２子でもあって，離乳食の配慮が正しくなされていて，乳児に与えたい食品を豊かに工夫して与えている。従ってその身体の発育も，乳汁栄養の場合は体重も少なく，標準より小さく，良好とはいえなかったのに対して，離乳開始以後の体重増加は著しく，皮膚が緊張していて，血色も良く，活気があり，低出生体重児のおもかげもない。スプーンを持つ自立意欲も十分あり，７，８か月から，パンを自分の手で持って食べ，９か月以後には，食事の時間になると，自分から食卓に近づき，自分で腰掛によじのぼる等，食事に対する興味および喜びをよく示している。M. Mは４か月末から母乳をやめ，人工栄養で規則授乳であったが，離乳の開始が遅れ，入室と前後して６か月からはじめている。しかも食事の内容が，アメリカなどで広く用いられているベビー・フードのかんづめをそのまま調理工夫もせず与えており，乳児の状態の把握がなされていないまま，食欲に関係なく，強制もせず，乳児の受け入れが気

分まかせであったようすで，ナースリー・ルームにおいての食事は（図7）および（図8）のごとに，離乳の第一段階からあらためて与えられている。その結果として，現在でも，食事の量は少なく，食欲にむらがあり，目新しいものには，喜びを示さず，病気にかかり易く，自立も遅れている。

離乳食の摂取状況では，その成長，発育にともない，離乳の進行とともに食品の種類も増加し，調理の方法も変化させてゆくために，前述の身体および精神発達の結果のように両者を比較するのは困難なので（図8）に示すようにナースリー・ルームの基準とR．Y，M．Mのはじめて与えた食品とその時期を比較し，これが両者にどのように影響しているかを観察してみた。

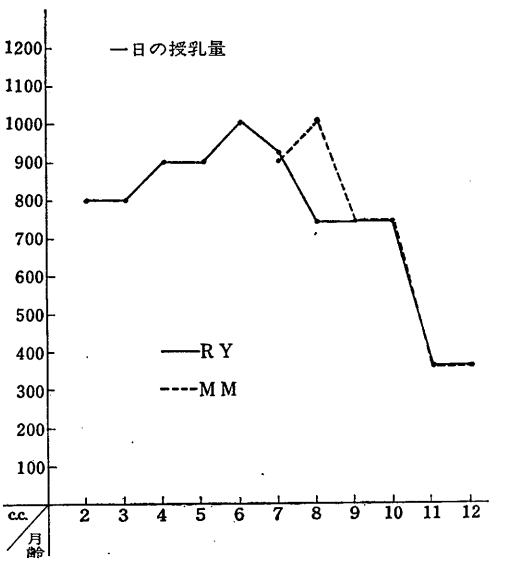


図 7

ナースリー・ルームの基準とは文部省科学研究離乳研究第4回協議会報告を参考にして，ナースリー・ルームにおける乳児の標準的発達状況を基本として独特の離乳を進めているもので，その実施にあたっては，この基準をおよその時期と食品をめやすにして個別的にすすめている。

ナースリー・ルームで初めて与えた食品と，その時期の比較は，

R．Yにおいては2か月より体重増加も順調であるから徐々に基準にそって与えられた。

M．Mの場合は4～5か月の離乳準備時期に入室していなかったので，7か月になっているにもかかわらず4～5か月の時期に与えられなかった食品を含めて短期間に数多くの食品を与えることになり，その結果は次の通りである。（図8）

離乳食品を比較的，継続的に徐々に種類をふやして，バラエティーに富んでいるR．Yの方が一般に食事に対する関心度が高いことが生活全般にあらわれている。

結び：ナースリー・ルームの乳児保育は，大学の施設としては珍しいので，その運営については，独特のものが多く，日課・連絡・食事などにその特徴がみられる。

その集団保育の実態とともに，事例をあげてここに乳児保育の実際を紹介したわけであるが，産休あけから入室したものと，生後6か月より入室したものでは，母親の養育態度による影響がはっきりと，その後の生活にあらわれ，心身の発達に直接に関係していることが示されている。しか

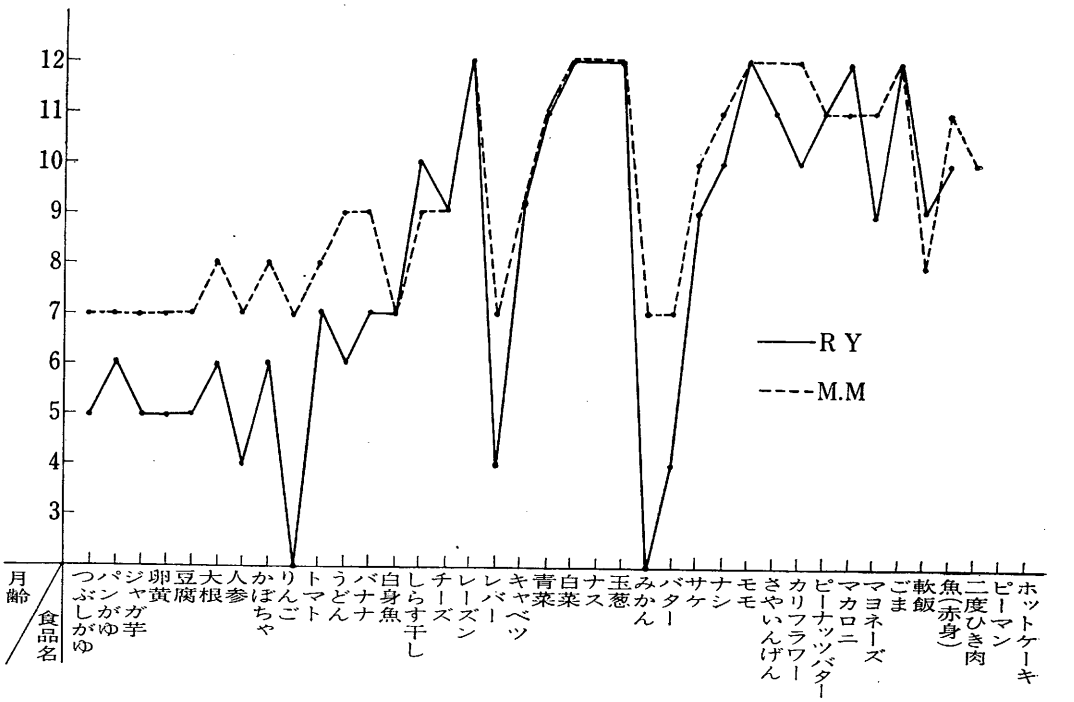


図 8

し，満1歳ごろになると乳児の集団生活によって，保育者の扱い方，栄養の与え方，家庭環境との関係，両親と保母との連絡などいろいろな因子が心身の発達に影響してくることがはっきりとあらわれている。ここにナースリー・ルームの今後の問題があるわけで，着実な実績の記録と，体験を加えて一段と内容の充実をはかり，独自のよりよい保育を心掛けてゆきたいと思う。

参　考　文　献

1) 阪正和：小児保健研究：Vol. 26, No. 3, 1968
2) 岩波文門：小児科臨床：Vol. 18. No・10, 1965
3) 山下俊郎：幼児心理学：第3版：朝倉書店：1957
4) 高木俊一郎：小児精神医学の実際：医学書院：1964
5) 母子愛育会編：乳幼児の保健指針：日本小児医事出版社：1967
6) 森重敏他編：現代教育心理学：家政学研究所：1965